菊の風

Shaplaneer
since 1972

vol.290
2020.December

特集 困難で不安な時代に立ち向かう

次期中期ビジョンの策定状況報告

INDEX

特集

困難で不安な時代に立ち向かう
次期中期ビジョンの策定状況報告

4 ビジョン策定のこれまでと次期ビジョン

6 次期中期ビジョン策定の進捗報告

9 国内事業の取り組み開始に向けた検討

11 理事・評議員からのメッセージ
2020年度 新任理事・評議員紹介

14 PROJECT・NEWS
明日への希望につながった緊急救援（ネパール）
サイクロン発生時にみられた連携した動き（バングラデシュ）

16 この人に聞きたい
認定NPO法人マギーズ東京 共同代表理事 鈴木 美穂さん

19 シャテシャテ!
楽天株式会社

20 シャプラバ
ユース・チームメンバー、ユース・フォーラム2020実行委員長
原 愛子さん

21 クラフトリンク
お待たせしました!
いよいよフェアトレード活動再開

22 COVID-19に負けず働く少女を守る!
～クラウドファンディングのご報告と御礼～

24 PHOTOきちゅね／ハンチカ／今月の切手

25 シャプラ文化部
街が光に包まれるお祭り ティハール

26 会報満足度アンケート報告

27 お知らせ

穏やかな空気が流れるネパールのダルマスタリ村。夫を失った寡婦たちの自助グループの書記を務めるサシさん。同じ境遇の女性たちと支えあえる場をつくれるのが嬉しいと語る。
（撮影：渋谷敦志）

Shaplaneer
since 1972

「誰も取り残さない。」

社会のさまざまな制度や仕組みから取り残され、
すべての人が持つ豊かな可能性が
奪われてしまうことがあります。

私たちは人に寄り添い自らも当事者になることで
社会課題の解決を進めています。

貧困のない社会の実現をめざして。

南の風　通巻290号（季刊）
2020年12月1日発行

発行元　特定非営利活動法人
シャプラニール=市民による海外協力の会
発行人　坂口和隆
編集長　小松豊明
編　集　京井杏奈　原囿心　宮原麻季
デザイン　柴田篤元（matricaria.）
印　刷　株式会社上毛印刷

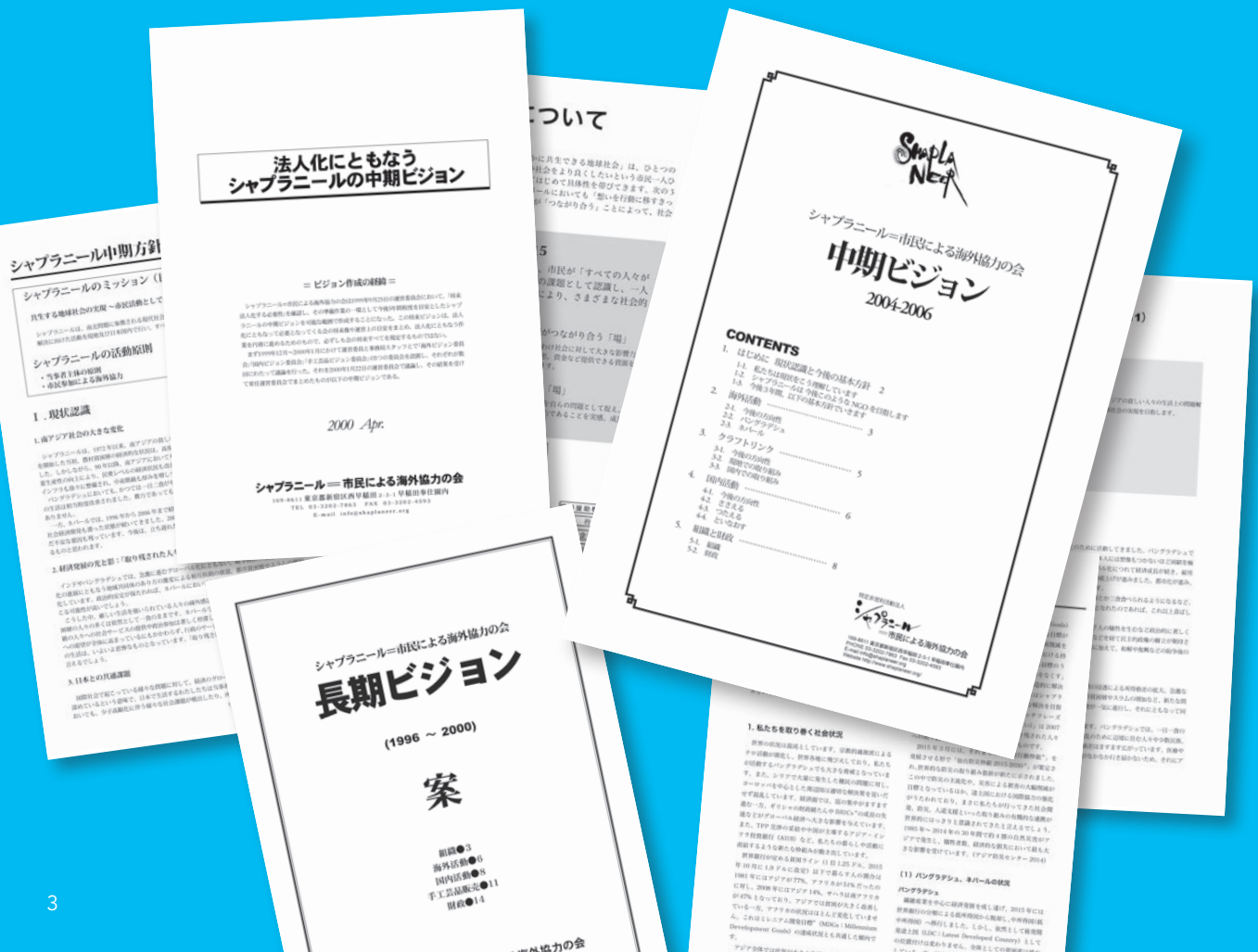
東京事務所（火曜から土曜　10:00～18:00、日曜、月曜、祝日定休）
〒169-8611 東京都新宿区西早稲田2-3-1 早稲田奉仕園内
TEL 03-3202-7863　FAX 03-3202-4593
E-mail info@shaplaneer.org
Web https://www.shaplaneer.org/

特集 困難で不安な時代に立ち向かう

次期中期ビジョンの策定状況報告

シャプラニールでは、90年代当初から組織のミッションを実現するための3～5カ年の大まかな方向性を記した中長期のビジョンを策定してきました。現行の中期ビジョンは2020年をもって終了するため、現在、事務局と理事、評議員、会員からなるタスクフォース※を中心に新たなビジョンの策定を進めています。
今回の特集ではこれまでのビジョンと策定中の新ビジョンの進捗についてご報告します。

※通常の組織内の役割分担とは別に、必要に応じ期間の限定された業務を行うために職員や役員または外部専門家等をメンバーとして設置される組織単位。



ビジョン策定のこれまでと次期ビジョン

文／代表理事　坂口 和隆

これまでのビジョンの変遷

1991-1995 長期ビジョン

数値目標・スケジュールとも実現可能性より理想を語った。

1992年に開催された合宿イベント「夏の集い」。全国から会員・ボランティアが集いさまざまな課題について議論した

1996-2000 長期ビジョン

数値目標にはこだわらず、組織規模の拡大やNPO活動支援法制定の動きを踏まえ法人化の必要性を謳っている。1996年から開始されたネパールでの活動を安定させること、さらなる新規対象国の検討も。

ネパール丘陵地帯で開始した農村開発プロジェクトの様子

2000-2004 法人化に伴う中期ビジョン

法人化に伴う作業を円滑に進めることを目的とした。「南」と「北」の関係性の変化を受け、援助から共生への転換の必要性が強調され、部門ごとの行動指針として策定された。

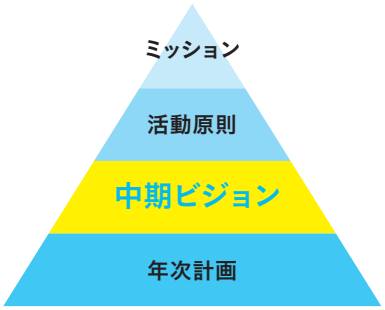
30周年記念ビデオ「援助から共生へ」

ビジョン策定の必要性

多くのNGOやNPOなど民間非営利組織は、時々の流行に左右されてミッションから活動を乖離（かいり）させないため、年度の計画を越えてじっくり活動をつくるため、財務計画を近視眼的にさせないためなどを目的として、3年から5年程度の方向性を示す中長期のビジョンをつくっています。

ビジョンの策定は、【図1】のようにミッションを頂点として、活動原則（コアバリュー）、ビジョン、毎年度の活動計画に至るまで首尾一貫させることが大切です。

シャプラニールも上記のように91年度からビジョンをつくってきました。その時々の組織内外の状況に応じて期間や書きぶりは異なっていますが、毎回、理事や評議員、会員、マンスリーサポーター、職員など組織にかかわる方々で議論を重ねながら策定しています。



【図1】中期ビジョンの位置づけ

特集 困難で不安な時代に立ち向かう 次期中期ビジョンの策定状況報告

家事使用人の少女たちが英語を学ぶ（バングラデシュ）

協働による洪水に強い地域づくり（ネパール）

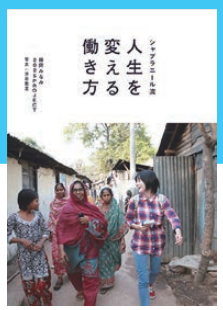
手織布の生産者（ネパール）

2016-2020 中期ビジョン

活動原則（価値観）を整理し、重点活動分野として「子どもの権利」「防災」「フェアトレード」の３本柱が確認された。

2013-2015 中期ビジョン

貧困課題の解決と人育ちの「場」づくりを目標とした。



40周年記念書籍「人生を変える働き方」。学びの「場」づくりの一環として

2007-2012 中期方針

ミッションからアクションプランまでの首尾一貫性を重視。取り残された人々について明文化した。

取り残された人々への取り組み・障害者支援活動（バングラデシュ）

2004-2006 中期ビジョン

代表理事のリーダーシップで財政危機からの脱却を最重要事項とした。新しい国や地域、分野での取り組みについて言及。

家政婦として働く女性の支援活動。家政婦として働く女性の話を聴く当時の駐在員（インド）

2004年度以降のビジョンはウェブサイトに公開されている「年次報告書」に掲載しています　https://www.shaplaneer.org/about/report/

50周年にふさわしいビジョンを

今年度は8回目の中期ビジョンの策定を行っています。COVID-19感染拡大のみならず、変化が激しく不確実な社会情勢にあって、2022年に50周年を迎えるシャプラニールは何を以て社会に貢献できるのか、その存在意義が問われるタイミングでのビジョンが求められます。

策定のプロセスについては後段の記事で詳しくお伝えしますが、現在の延長線上にあるビジョンではなく、これまでに培ってきた知見・経験を活かしながら新しいシャプラニールをめざすことを念頭に置きながら議論を重ねています。

例えば、5年でめざす社会としては、「分断・不寛容から他者へ思いをはせて動く社会」、「人々が協力し自ら考えて動く（当事者性・エンパワメント）社会」、「いまより格差が縮まっている社会」、「社会参加の選択肢が広がっている社会」などのキーワードが出されているほか、活動方針としては、「より取り残された課題・地域・人々にフォーカスを当てる」ことから、組織の規模や活動対象国、さらには組織名などについても聖域なく議論しています。

今後は会員やマンスリーサポーターの皆さまからのご意見を伺いつつ、策定タスクフォースや事務局、理事、評議員との議論を経て、次年度の総会で最終案を提出することとなります。今号には現時点の骨子案に対してのアンケートを同封しています。皆さまからの忌憚のないご意見をお待ちしています。

ベランダでパクチーを育て始めました。これで新鮮なパクチーがいつでも食べられる、楽しみです。（内山智子／バングラデシュ事務所長）

次期中期ビジョン策定の進捗報告

文／理事　椎名　麻衣

1 メンバー紹介

次期中期ビジョン（2021年度～2025年度）を検討するにあたり、2020年2月から中期ビジョン策定タスクフォース（以下、タスクフォース）が発足しました。この次期ビジョンは2021年6月の総会にて会員の皆さまに審議いただけるよう現在策定を進めています。今回はタスクフォース発足から2020年9月までの中期ビジョン策定の進捗をご報告します。まず、今回のタスクフォースのメンバーは次の通り、会員、評議員、理事、事務局職員の計7名で構成されています。

中期ビジョン策定タスクフォースメンバー

天知　稔（評議員・地域連絡会「とちぎ架け橋の会」代表）
勝井　裕美（ネパール事務所長）
京井　杏奈（国内活動グループ・チーフ）
小松　豊明（事務局長）
坂口　和隆（代表理事）
椎名　麻衣（理事）
田中　直樹（会員）

（50音順・敬称略）

10月6日の中期ビジョン策定タスクフォースのオンライン会議にて
上段左から坂口、椎名、小松、下段左から天知、勝井、田中　※京井は欠席

2 タスクフォースでの議論

タスクフォースのメンバーは、2020年2月に顔合わせ、現行のビジョンについて振り返りを行い、来期のビジョン作成をスタートさせました。また、3月中旬から4月初旬にかけて理事、監事、評議員、事務局職員を中心に当会の内外の状況についてアンケートを実施しました。

日本、活動国を含めた現在の社会状況をはじめ、シャプラニールの現状、5年後どうなっていたいか、具体的な活動についてなど、多岐に渡る意見が寄せられ、アンケート結果は名前を伏せた形で理事、監事、事務局職員に共有しました。このアンケート結果をもとにタスクフォースにて議論を行い、【表1】のような意見が出ました。

3 理事・職員合同会議での議論

7月に理事、事務局職員による合同会議をオンラインにて開催しました。50周年を前に

特集 困難で不安な時代に立ち向かう 次期中期ビジョンの策定状況報告

【図1】合同会議で出された意見

問1　シャプラニールとあなたの存在意義は？

- 歴史に裏付けされた信頼感・専門性・ネットワークがある
- 「当事者主体」とはと常に問い続けて活動を進めている
- 市民参加、多様なアクターが関わっている
- シャプラニールに関わる人すべてにとってのエンパワーメント
- 日本にいる外国人を助けるのではなく、仲間に！
- プロセス志向を大切に、支援の仕方を試行錯誤してきた
- 社会的なインパクトをもたらす団体
- 国内と海外の対話の場を作ってきた
- 取り残されがちな地域、人々に着目し課題解決に取り組む
- これからNGO／NPOの中で、市民社会組織のリーダー的な存在でありたい

問2　これからのシャプラニールの活動はどこに向かうべきか？

- コミュニティ防災（国内と共通の課題）
- 海外での経験を日本で活かす。外国人労働者の支援
- 10年後を見据えて今の若い世代やこどもたちへの働きかけ
- 多文化社会の共生（場づくり）
- 柔軟に活動を決められる若手チーム、コーディネーション場づくり
- 在日外国人（ネパール人）と一緒に活動する、問題を考える
- 活動を絞って資源を集中
- 財政規模、事業地域の拡大に対する検討をしていく
- コロナ禍で元々あった課題の深刻化、新しい課題の出現に対する取り組み
- 他NGOとの協働での活動、組織運営等のノウハウ支援
- 支援先を活動国にこだわらなくても、「イシュー」ごとに事業を進めても良いのではないか

【表1】アンケート結果をもとにタスクフォースで議論した内容

組織運営について

- 今まで培ってきた団体の価値観の継承が重要
- 質か量（規模）かではなくバランスを取るべき
- 社会的インパクトを広げるための組織規模拡大と、組織が大きくなった後についても検討する

事業内容について

- 児童労働削減は、他団体との連携・協働の可能性
- 子どもの権利を守る活動、防災、フェアトレードの3本柱に縛られず議論すべき
- バングラデシュ、ネパールだけでなく、他の国も含めて検討していきたい
- 今の活動スタイル以外のことも考えていきたい。ビジネス的なアプローチで課題解決を行う団体に投資をするといった可能性もあるのでは

連携・協働について

- 企業とだけでなく、NGO間の連携も大事
- 他団体と一つのことに協働で取り組んで大きなインパクトを出すという方法もある
- 規模を大きくするのかどうかは、丁寧な検討が必要
- 企業の関心が高い課題は児童労働関連。例えば児童労働で人権を侵していないかといったことに関心がある

今後のビジョン策定にあたっての検討事項

- シャプラニールはどんな社会を目指していくのか、そのためにどんな活動をするのか
- 定款にあるように、「すべての人々の能力が開花する社会を目指す」というのは変わらない。しかし定款策定時にイメージしていた課題と現在の状況は違う
- 50周年を節目とし、シャプラニールの存在意義とは何かを考える

わたしたちの存在意義はなにか、その中の自分の存在意義はなにか、これからどこに向かうべきかについて明らかにすることを目的に、3時間じっくりと議論しました。

これらの問いについて4～5人のグループで議論し、全体で共有、最後に理事、事務局職員から一人ずつ気づきや感想を言葉にしていきました。各グループからの意見は【図1】をご参照ください。

皆が共通して考えていること、過去を振り返ってみて気付いた点、もっとこうした方が良いのでないかという提案等、多くの意見が出た貴重な時間でした。

4 会員・マンスリーサポーターとの意見交換会

8月に合同会議で理事、事務局職員から出た意見をタスクフォースで改めて振り返り、これからどのようにまとめていくかといった議論を行い、骨子案を作成し始めました。

9月には会員、マンスリーサポーターにお集まりいただき、オンラインにて意見交換会を実施しました。最初にこれまでの策定プロセス、骨子案、具体的な活動案について説明し、その後タスクフォースメンバー、事務局職員それぞれの自己紹介から始めました。ご参加いただいた10名の会員、マンスリーサポーターの方の中には、最近入会した方もいれば、10年、20年、なかには40年前から会員としてご支援いただいている方のご参加もありました。

その後少人数のグループに分かれ、30分ほど意見を伺いました。表2にあるとおり、組織全体、組織の規模、活動内容についての意見をいただきました。タスクフォースメンバー、理事、事務局職員とは違う新たな視点、ご意見をたくさんいただき、これらをもとに改めてどのように中期ビジョンをまとめていくかタスクフォースで検討しています。

【表2】会員・マンスリーサポーターとの意見交換会でいただいたご意見

シャプラニール全体のこと

- シャプラニールの強みの一つは「継続」してきているということ
- シャプラニールがめざす社会変革が何を意味するのか明確にしたほうがよい
- これまでの活動から見えてきたシャプラニールの弱み、強み、機会、脅威を分析し、これまでの50年間の評価をすべき

組織規模について

- 組織拡大という意見があるが、コンパクトな組織の方が柔軟な活動ができるのではないか
- 小さな活動を積み重ねていくことが、（分断等によって生じた）傷を癒していくのではないか
- 世の中の変化に柔軟に対応できるシャプラニールであってほしい
- 組織規模を大きくするためには、他のNGOとの連合や合併、組織改編を想定していく必要があるのでは

活動内容について

- 現地での活動では、サービス提供だけではなく、アドボカシーや制度改革にも取り組んでほしい
- シャプラニールがこれまで南アジアで培ってきた経験を日本国内の課題解決へ還元してほしい
- 異なる人、社会を理解するのに直接対話は欠かせない。シャプラニールには両者を結びつけるコーディネーターのような役割ができるはず
- フェアトレード（クラフトリンク）は市民参加の方法として大切。販売規模は小さくすることにしたが普及が大切になっていくのではないか
- Zoomなどを活用して会員がつながる機会、シャプラニールの活動が理解できるようにわかりやすい言葉で活動を説明、議論できる機会を
- COVID-19を考えに入れながら活動案を作成すべき
- 新しい国が増えればその国のファンの獲得につながるかもしれないが、支出も増える。それより活動国内の対象地域を増やした方が良い

5 皆さまの「声」をお聞かせください

今回の会報に同封する形で骨子案をお送りします。会員の皆さまから中期ビジョンへの新たな意見を頂戴した上で、タスクフォースで集約し、2021年2月を目標に中期ビジョンの最終案を策定します。タスクフォースのメンバーとして中期ビジョン策定プロセスにかかわらせていただき、改めてシャプラニールは一人ひとりの意見を聞き、いただいた声を反映させていく面白い組織だと感じています。シャプラニールにかかわってくださっているすべての方の想いを込めた来期ビジョンになるよう進めてまいります。今回プロセスの中でご意見をくださった皆さま、お忙しい中ご協力いただきまして本当にありがとうございました。

国内事業の取り組み開始に向けた検討

―在留ネパール人のヒアリングからみえてきたこと―

中期ビジョン策定プロセスのキックオフとして開催した理事・職員合同会議の中で、参加者から、在留ネパール人など、日本社会で生活する外国人との共生社会の実現に向けた取り組みの必要性について意見が出されました。日本国内での課題にもチャレンジしてみたいという意識は今回の中期ビジョン策定よりずっと以前よりあり、今回の中期ビジョンの策定プロセスの中で、日本の国内課題として、在日外国人、特に近年増加が顕著なネパール人、私たちが長く活動してきたネパールから来日している人々へ向けた取り組みというところまで、意見が集約されてきた状況です。

文／宮原 麻季（海外活動グループ）

ヒアリングに回答してくれたネパール人夫妻。夫は留学を終えて就職。妻は結婚後来日した

はじめに

シャプラニールでは、在日外国人に向けた取り組みを具体化させるために、情報収集、文献整理、ネパール人を取り巻く日本人の関係者、例えば日本語学校、外国人在留支援センター、多文化共生支援団体、などに話を聞いてきました。また、当事者であるネパール人にも現在順次ヒアリングをしているところです。

まだ情報収集の途中で、十分な精査にまで至っていませんが、ヒアリングの中で聞かれた意見を紹介し、今後の取り組みと検討が必要と考えていることについて報告します。

中長期的な生活の場としての日本

日本に生活するネパール人は96824名（注1）で、10年前の2009年には15255名であったので、10年間で6・3倍に増えています。この右肩上がりの状況は2019年まで続いています。2020年以降の数値はまだ発表されていませんが、COVID-19の影響で全体的な入国者数が減少したこと、2019年に留学在留資格が減少したことで、2019年までと同様の増加幅にはならないことが見込まれます。とはいえ、日本で中長期的に生活を希望するネパール人

毎晩の読み聞かせから、絵本の奥深さに改めて気が付きます。おすすめの絵本、教えてください！（京井杏奈／国内）

注1：法務省「2019年12月在留外国人統計」
注2：臨床心理士のビゼイ・ゲワリによれば2017年に8名のネパール人が自殺していると指摘する。
https://mainichi.jp/english/articles/20190507/p2a/00m/0fe/021000c

が多いと言えます。

在留ネパール人の在留資格は多様ですが、その中で最も多いのが留学、技能、家族滞在で、在留ネパール人の約75％を占めています。次いで最近数を伸ばしているのが「技術・人文知識・国際業務（以下技人国）」という在留資格で、留学生として入国したネパール人が専門学校等を卒業し、技人国資格取得を目指すケースが多いようです。

技人国は家族呼び寄せと、更新が可能で、呼び寄せ家族の就労も制限付きながら可能です。技人国資格保有者は10年前と比して34倍に増えていることから、留学生の中でも留学から就職というプロセスで中長期での日本滞在を目指す人々が一定数いることが伺えます。ヒアリングでも、留学生に限らず、技能や家族滞在資格保有者から「来日のために作った借金返済のために日本で長く働きたい」「子どもに日本の教育を受けさせるためにできる限り長く日本にいたい」といったコメントが複数聞かれました。

長くいるのに基盤がぜい弱

日本での中長期の生活を希望する一方で、日本での生活に課題を抱えている一部のネパール人の姿が見えてきます。

ヒアリングで聞かれた声としては、当事者からは「困ったときに相談する相手がいない」「行政サービスがよくわからない」、支援団体からは「必要な（または伝えたい）情報が伝えられない」「友達になっても意外と本音を語ってくれない」といった声が聞かれました。

今現在の生活で抱えている課題や将来訪れるかもしれない生活上の変化（病気や妊娠、離婚等）に対応する手段が少ない現状が伺えます。一方で、受け入れ側である日本社会では多言語の情報発信が増えつつあります。しかし通訳ボランティア制度など、仕組みはつくっていても基本的に待ちの姿勢にならざるを得ず、つなぐ役割を担うアクターの不足が見て取れます。

共生社会の実現への課題

日本人との接点の少なさというのは、ネパール人以上に支援団体等の日本人側から聞かれた声です。留学、技能、家族滞在などの在留資格を持つネパール人は、日々の生活や学業、仕事で忙しく、日本人との交流やコミュニティへの参加はどうしても優先度が下がってしまいます。したがって、交流をする機会が非常に限られていることで相互理解の糸口がなかなかつくれません。

また、残念なことに在留ネパール人の自殺（注2）も発生しており、推定される原因はさまざまですが、生活上で抱える悩みに対する支援にアクセスできずに孤立した存在になっていることが伺えます。自分自身が声を発せない人たちの代わりに、その人たちが抱える課題を社会にむけて広く発信する代弁者の役割を担う人々がまだまだ少ないのが現状だと感じました。

実際に動いてみる

情報収集を継続しながら、具体的に動き出すことも併せて検討しています。まず出来ることとして、「日本人との接点が少ない」という課題に対して、ネパールでの活動経験を生かし、在留ネパール人との接点をつくり出すことを目的に「立ち寄りスペース」のような場を提供する、といったアイデアが出ています。

在留ネパール人が、相手がネパール語の話せる日本人であってもなかなか本心を打ち明けないという現実がある中で、複合的なアプローチが必要であろうことは理解した上で、それでも実際に動いてみることを通じて、課題について理解を深め、実践に反映していきたいと考えています。